

令和3年度海洋教育実施状況報告書

1. 実地概要

学校名

| |
|--------|
| 糸満南小学校 |
|--------|

採択活動名

| |
|----------------------|
| ～私たちの糸満市～糸満の海について学ぼう |
|----------------------|

実施単元 ※実施した単元の数に応じて記載してください

| 単元名 | 学年 | 教科 |
|-----------------------------|----|-------|
| 1.いろいろなふね・造船所見学 | 1 | 国語 |
| 2.海の宝物を探しに行こう(貝殻探し) | 2 | 生活・図工 |
| 3.市のようす・海人工房見学・サバニ船体験学習 | 3 | 社会・総合 |
| 4.ごみはどこへ・見直そう私たちの環境 | 4 | 総合 |
| 5.水産業のさかんな地域・糸満市の水産業 | 5 | 総合・社会 |
| 6.海のお仕事について知ろう・海の安全について考えよう | 6 | 総合 |

取り組みの概要

| |
|---|
| <p>1 「いろいろなふね・実習船見学」</p> <p>国語の単元「いろいろなふね」で勉強した。その発展学習として図書館で他のいろいろな乗り物について調べた。最後の発展学習として市内のある企業「新糸満造船所」に伺い、たくさんの船を見学できた。</p> <p>2 「海の宝物を探しに行こう」</p> <p>地域の生き物について学習した。沖縄水産高等学校・海洋サイエンス科の奥田先生を講師としてお呼びし「地域の生き物」について学習を行った。糸満の海について興味を持たせ、その中から身近にあるビーチに焦点化をあてた。実際にビーチに行き貝殻を拾った。貝殻を使い写真立てや宝箱を作成した。</p> <p>3 「市のようす・海人工房見学」</p> <p>社会の単元「市のようす」から糸満市の今と昔の違いを学習した。衣・食・住の視点から調べ、実際に昔の道具が展示されている海人工房さんに伺った。昔の道具を見学したり、触れる体験も行った。館長さんから講和を聞くことができた。特に「海人」について講和をしてもらい、道具の使い方や実際にサバニにも乗ることができた。午後は美々ビーチ行き、学校の保護者に協力してもらい、サバニ体験を行った。</p> <p>4 「ごみはどこへ・見直そう私たちの環境」</p> <p>四年生は社会「ごみはどこへ」から家庭のゴミについて調べた。家庭のゴミから地域のゴミに繋げ、学校の近くにある南浜ビーチのゴミの状況がどうなっているか調べた。その際に砂も採取し、マイクロプラスチックがあるかも実験し採取してみた。またマイクロプラスチックを深く知るためにGODACさん(国際海洋環境情報センター)とオンライン授業を行い、沖縄のマイクロプラスチックの現状を知ることができた。マイクロプラスチックの採取はプラスチックなのか貝殻のかけらなのか見分けがつかないのもあり、顕微鏡で観ても確認できないものもあった。簡単にはマイクロプラスチックと判断できないことが分かった。</p> <p>5 「水産業のさかんな地域・糸満市の水産業」</p> <p>社会「水産業のさかんな地域」について学習した。その発展学習として、沖縄の海の生き物について豊見城にある「DMM水族館」に見学に行った。見学に行く前に本校体育館にDMM水族館の館長さんに来</p> |
|---|

ていただき、沖縄の海の生き物について講和をしていただいた。午後はグラスボードに乗り、那覇港近海の市中の生き物を見学した。二学期後半に海産物を使ったアイデア料理を考え、家庭に協力してもらい家で調理してもらった。三学期にプレゼン資料を使い、発表をした。

6 「海のお仕事について知ろう・海の安全について考えよう」

6年生は総合学習で糸満市の魅力について学習した。その一環としてキャリア学習の視点から市内のマリン事業で活躍されている方をお呼びし、講和をしていただいた。仕事のやりがいやこの事業を始めたきっかけについて話してもらった。また環境の面にも尽力されており、那覇空港のサンゴ移植の件についても話してもらった。ただ海を使って仕事するだけでなく、海を持続可能に継続できるよう工夫をしていることも分かった。

1 「いろいろなふね・造船所見学」



2 「海の宝物を探しに行こう」



3 「市のようす・海人工房見学」



4 「ごみはどこへ・見直そう私たちの環境」



5 「見直そう私たちの環境」



「海のお仕事について知ろう・海の安全について考えよう」



2. 自己評価

(1) 妥当性

①テーマと目標設定について

- ・学校の重点目標・海洋教育の目標と照らし合わせ学校独自の海洋教育目標を作成することができた。それを踏まえた上でテーマも作成した。

②学習内容の分量（無理のない計画であったか）について

- ・コロナの影響もあり二学期の途中からしか活動できなかった。その時期から始めたので計画的行うことが難しい部分があった。

③内容は適切であったかについて

- ・学年の先生方と海洋教育主任が中心となって話し合いの場を持った。各学年のテーマなどを確認し、児童の発達段階にあった内容で学習を行うことができました。テーマに沿った内容で進めていきました。

(2) 有効性

①計画通りに実施されたか、協力体制について

- ・今年度はコロナの影響もあり、当初海洋教育ができるかもわからなかった。二学期に行うことが決定したので、計画通りに行うことが難しかった。いろいろな企業・学校と協力願いをしたが、ほとんど断られ、難しい状況であった。

(3) 効率性

①学習の実施時期は適切であったかについて

- ・今回はコロナの影響もあり、一学期から始めることができなかった。9月後半ごろから動くことができた。どの学年も体験活動を行うことができたが、学年によっては体験活動の時期が過ぎている学年もあった。

②物資、資金などの規模や質は適切であったかについて

- ・高校や企業等、コロナの影響もあり忙しい中だったが快く引き受けてくれた。教育に関心を持っており、積極的に関わってくれた。

(4) 持続性

①学習内容や成果が適切に活用される見込みがあるかについて

- ・次年度は校内研修で海洋教育について進めていく予定である。

(5) 信頼性

①十分な体制が整えられたか、外部への公表・発信について

- ・外部機関や他学年の先生方と体験学習を行うまでに打ち合わせを何回も行った。どの学年も怪我なく体験活動を行うことができた。
- ・校長だよりで発信・共有しているものの、十分に外部に発信しているとは言い難い。他にどのような方法で外部に発信できるか考えていきたい。

(6) 成果と課題

①成果

- ・今年度は体験活動が中心だった。どの学年も海について興味・関心を持つことができた。次年度はそこで学んだことを探求型の学習に発展できるようにしていきたい。
- ・身近な地域を学習することにより、地域の特徴や良さを知ることができた。
- ・昨年度よりも多く、様々な体験活動ができた。

②課題

- ・今年度もコロナ禍で体験活動が制限されることが多かった。
- ・体験活動で終わっていた。活動したことを基に探究活動まで繋げられるようにしていきたい。

【その他コメント・感想】

- ・今年度もコロナの影響により、計画通りに進まず、難しい部分もあった。しかし海洋教育を行うことにより確実に子ども達の興味・関心は向上している。この事業を持続できれば、もっと面白くなるなど感じた。二年間で流れは把握できたので、次年度は4月から計画通りにどの学年も進めることができると感じた。
- ・難しく感じたところは外部との調整であった。コロナの影響もあるためかほとんどの企業・学校が協力できなかった。やりたい内容があっても、できない部分があり厳しい所があった。また外部調整でも企業によってはうまく進められない所あり、スムーズにできる方法はないか考えていきたい。(金銭的なところ)。

3. 関係者評価

- ・の協力を得て、サバニ体験を実施できた。地域の子供用のサバニを借り、学校の近くのビーチで行った。
- ・糸満ハーレーが実施した際は学校代表として参加して欲しい。その際に指導も協力したい(コミュニティースクールメンバー)